

豊明希望チャペル礼拝

2026/8/30

宣教を妨げる神の導き

使徒 16 章 6~8 節

【序：神の導き】 教会が宣教の働きをしていく中で、様々な否定的な状況に遭遇することがあります。特に教会活動や宣教が思い通りに運ばないときに、よく聞くのは「サタンの妨害だ」というコメントなのではないかと思うのですが、今日の聖書箇所においてはちがった表現がされています。

「それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許されなかった。それでミシアを通って、トロアスに下った。」

これはパウロの第二次伝道旅行の最中で、この出来事の前を見ると 16 章 1、2 節に、デルベ、リステラ、イコニオンという地名が登場します。位置を確認してみると、ガラテヤ地域の地名になります。そこでのパウロの働きは 5 節に「こうして諸教会は信仰を強められ、人数も日ごとに増えていった。」とあるように一定の成果を得ることができたということでしょう。

そこで、パウロは西に向かって宣教地を広げようとしていきましたが、今日の箇所 6 節でアジアでみことばを語ることが禁じられたというのです。誰かから「あなた方はアジアでイエスのことを伝えてはいけない」と言われたのではないでしょう。というのも、ここには「聖霊によって禁じられた」と表現されています。ということは、神様がパウロ達の宣教活動を妨げたということです。アジアでみことばが語る事が出来なくなったことで、パウロ達は「フリュギア・ガラテヤの地方」を通って行きます。そこから北西に向かっていったということでしょう。

そして 7 節を見ると「こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許されなかった。」とあります。彼らはアジア地域から離れてその北にあるビティニアに行こうとしたら、それもとどめられているのです。しかも、パウロ達をビティニアに行かせなかった張本人について聖書は「イエスの御霊が」と表現しているのです。目で見える形でイエス様の御霊が現れてストップさせたのではないでしょう。その様に判断したのはパウロ自身なのか、同行していたシラスなのか、それとも使徒の働きの記者であるルカなのかは何とも言えませんが、聖書が神のことばであることを認めるのであれば、神様ご自身がそうしたと言えるでしょう。

冒頭で、教会活動のなかで否定的な出来事に遭遇した時に「サタンの妨害」という表現が

されることがあるとお話ししましたが、この使徒の働き 16 章の出来事も状況だけから判断するなら「サタンによってみことばを語ることが禁じられた、悪魔がビティニアへの移動を妨げてきた、サタンめ！」となりそうなものですが、それも神様の導きだったということが確認されているのです。それに、もしも私たちの身の周りに起きる様々な否定的な状況や、教会活動における何らかの計画がサタンや悪霊の仕業によって留められたとするのであれば、サタンや悪霊のほうが神様よりも力が強いということになるのではないのでしょうか。ヨブ記の 1, 2 章を見ると、サタンですら、神様の許可された範囲内でしか活動出来ないことを知れます。パウロの伝道旅行が妨げられた背後にも悪魔や悪霊の何らかの働きがあったとしても、それをも神様の許可された範囲内であったと言えるでしょう。そして、アジアでみことばが語られたなかった事、ビティニアに行くことが出来なくなったという出来事が、パウロ達のその後の活動にプラスに働いていることを、私たちは使徒の働きのその後から知る事が出来ます。

【トロアスで】 この後のパウロ達の行動を見て見ると、8 節でパウロ達はトロアスに到着しています。そこで起きた事がその後記述されており、9 節には「その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、『マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください』と懇願するのであった。」とあります。そして、この時のパウロの反応は 10 節で「パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。」と言って、パウロ達は当初予定のなかったであろう宣教のルートを西に向かっていったのです。

【ピリピで】 そうして、彼らは 12 節で「そこからピリピに行った。この町はマケドニアのこの地方の主要な町で、植民都市であった。私たちはこの町に数日滞在した。」とあるように、ピリピでの宣教を開始しました。とはいえ、ここにはユダヤ人の会堂はなく、13 節には「そして安息日に、私たちは町の門の外に出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。」とあります。すると、その場に集まっていたユダヤ人達の中に、紫布の商人をしていたリディアという女性があり、彼女と家族がイエス・キリストの福音を信じました。そしてこの時以降、彼女がパウロの働きをサポートするようになっていったと言われています。当時紫布は染料としてはずいぶん高価で、彼女自身相当な資産を持っていたと考えられます。ということは、神様は彼女とパウロを引き合わせるために、アジアでみことばを語ることが留め、ビティニアへの移動を許すことなく、トロアスでマケドニア人の幻を見せられたということでしょう。その後、パウロ達は、ねたみから投獄されるのですが、その時超自然的な出来事を通して、その牢獄の看守と家族がイエス・キリストを救い主として受け入れる事に導かれています。

しかし、アジアやビティニアの人たちについては福音が伝えられずに可愛そう、と思うで

しょうか。しかし、第一ペテロ 1 章 1、2 節前半を見ると「イエス・キリストの使徒ペテロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアに散って寄留している選ばれた人たち、すなわち、父なる神の予知のままに、御霊による聖別によって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人たちへ。」と、このあたり一帯にも、後にイエス・キリストの福音が伝えられていたことが分かります。これらの地域に対しては、使徒の働き 16 章のタイミングでパウロによって福音が伝えられることはありませんでした。しかし、神様によって選ばれた人に対しては、その後他の誰かによって必ず神のことばは伝えられるということを知る事ができます。

私たちもそれぞれの活動には制限があり、出会ったすべての人に福音を伝えるのは不可能です。しかし、それぞれが置かれた環境の範囲の中で神様がその人に期待してくださっている事柄に忠実に取り組みさえすれば、私たちの手の届かないところにも神様の全能の力が働き、御業が成されているのです。

【ローマ行きの願い】 そして、その後のパウロの行動についても見て見ましょう。使徒の働き 19 章 21 節に「これらのこと があった後、パウロは御霊に示され、マケドニアとアカイアを通してエルサレムに行くことにした。そして、『私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ』と言った。」とあります。これはパウロが第三次伝道旅行の途中、エペソの町でローマに行く志を持った時の記述です。エペソからマケドニアとアカイアはエペソから西に 500km くらい行ったところになります。そこからローマに行くには地中海を渡ってさらに西に 700km の距離になるのですが、パウロの計画は先にエルサレムに行くという、全く反対方向の東に 1000km 以上移動することになります。物理的な距離から言うと、非効率的で遠回りと言えるでしょう。パウロがどうしてこのような順番で移動するように考えたのか具体的な意図は不明ですが、ここに「パウロは御霊に示され」とあります。ということは、この行程も神様がパウロを導いたということなのです。

実際に、この後の使徒の働きの記述を見ていくと、実際にその通りになっていることが確認されます。20 章 1 節でパウロはマケドニアに向けて出発しており、2 節で「ギリシアに来て」とあるのはアカイアのことで、そこでパウロはコリントに滞在していたようです。そこでパウロはローマ人への手紙を執筆しているのですが、その 1 章 13 節に次のようにあります。「兄弟たち、知らずにいてほしくはありません。私はほかの異邦人たちの間で得たように、あなたがたの間でもいくらかの実を得ようと、何度もあなたがたのところに行く計画を立てましたが、今に至るまで妨げられてきました。」彼はローマに行きたいと願いながらも実現に至らないので、その代わりにこの手紙を執筆したということが記されています。

【ローマ人への手紙】 そのパウロがローマに行けなかったことで執筆に至ったローマ人への手紙は、信仰義認の教理が論理的、体系的に記されており、その内容は論文とも言え

ると評価されています。ですから、神様はパウロにローマへの志を与えながらも、すんなり行かせないようにされたのであって、その理由がパウロに【ローマ人への手紙を書かせる】という事があったと言うことでしょう。

要するに、もしもパウロがこの時、コリントからエルサレムに向かうのではなく、近くまで来ているからといってローマに向かったのなら、この手紙が執筆される事はなかったことになります。そして、パウロがこれを書かなかったのであれば、当然聖書の中にも含まれることはありません。そして、このローマ人への手紙が聖書の中に残っているからこそ、現代の私たちが信仰義認という教理について、しっかりとした視点で学ぶことができるようになったのです。しかし、それは当時のパウロにとっては想像すらしてはいなかったことです。要するに「今自分がローマに行かないで手紙を書けば、後にこの手紙が聖書の書簡の一つとされ、世界中にこの内容が知らされることになる」なんて、思いつく可能性すらありませんでした。しかし、神様はしっかりとした計画をもって、パウロにこの手紙を書かせるために彼をこのように導いたという事が言えるでしょう。

【エルサレムからローマへ】 こうしてパウロはこの手紙執筆後にパウロはエルサレムに向かいます。すると、そこでパウロはユダヤ人達の誤解によって暴動にまきこまれます。サタンの働き…ではありません。この時、パウロはローマ兵によって保護されたのですが、使徒 22 章では、このときパウロは大勢の群衆の前でイエス・キリストの証しを語っています。また、使徒 23 章では最高法院の中で、使徒 24 章では総督フェリクスの前で、また使徒 26 章ではフェリクスの後任フェストゥスとユダヤのアグリッパ王の前でイエス・キリストの十字架と復活を語っているのです。これも、彼がエルサレムに戻っていなければ、決して行えなかったことです。少なくとも、パウロ自身「この時エルサレムに行けば、自分はユダヤ人の指導者につかまって、いろんな人達にイエス・キリストことを伝える事が出来る！」なんて全く予想だにしなかったはずです。しかし、この背後に神様の御手を見るのであれば、パウロをローマに行かせるのではなく、エルサレムを経由させることによって、御自分の計画を実現させようとしていたのでしょう。実際その途中、使徒 23 章 11 節には「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証ししたように、ローマでも証しをしなければならない』と言われた。」とあり、このことば通り、使徒の働き 28 章 14 節でパウロはローマに到着し、この神様の計画は成就しているのです。

【結論・適用】 以上が、パウロを導いた神様の働きでしたが、時には行く先を留め、語る事を妨げましたが、その後行くべき道に導き、時には遠回りをさせながらも、その途中で否定的な状況に遭遇させながらも、様々 なところで福音を証しさせるという、神様の計画通りに導かれたということが分かります。

私たちの信仰生活の中にも、時として【自分の計画】が留められることがあるでしょ

う。志半ばであきらめなくてはならない状況になるかもしれません。しかし、私たちにとって、それが不都合に感じたとしても、神様はそうにご覧になってはいません。箴言 19 章 21 節には「人の心には多くの思いがある。しかし、【主】の計画こそが実現する。」とあります。私たちが何かをしようと思って、それに取り組みながらも実現にいたらなかったとしても、それで神様の計画が妨げられているのではなく、神様の計画は必ず成就するのです。そして、その事に私たちが直接介入できなかったとしても、無関係ではありません。それは、ピリピ 2 章 13、14 節に次のようにあります「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。」パウロについて言えば、なかなかローマに行けなかったからこそ、ローマ人への手紙を執筆しました。その効果は彼が生きている間、彼自身は確認できていません。彼が召された後、その手紙が神のことば聖書として認められ、世界中のことばに翻訳され、私たちがそれを手にすることが出来ているのです。パウロがローマに行きたいと願いながらも行けなかったことによって記されたローマ人への手紙 8 章 28 節には「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」と宣言されています。ですから、この聖句への信頼を持っている私たちは万事に対して不平を言わず、疑うことなく、私たちに志を与えてくださっている神様の主権を認め、すべてのことを共に働かせ最善を提供してくださる神様への確実な信頼と共に、それをサタンの策略のせいにするのではなく、神様の御業を待ち望み続ける信仰にとどまる者でありたいと心から願いつつ、聖書宣教を閉じさせていただきます。